



A Re-examination of Theories on *Fuzoku* in the Modern Era
—a Theoretical and Historical Study—

青木隆浩

-
- ❶ 研究の目的
 - ❷ 民俗学における『風俗』概念の断絶
 - ❸ 観察記録としての風俗研究
 - ❹ 明治中期以降における西欧化の圧力と伝統主義
 - ❺ 風俗研究の衰退と復活

おわりに



第二次大戦後、『風俗』は一般に変化しやすい生活様式を指す言葉として、変化しにくい『民俗』から区別されている。しかし、この区別は近代以前の用法から断絶している。江戸時代から明治10年代まで、『風俗』は変化しやすいという意味を含んでおらず、単に観察可能な生活様式を示すだけの言葉であった。

明治20年代に欧化政策が急激に進められると、風俗は目まぐるしく変化した。これに対応して、『風俗』は変化するものと認識されるようになった。

また、それに対抗する人々は伝統回帰を目的として、風俗の歴史的変遷を研究し、国粹主義の啓蒙活動に役立てようとした。この際、西欧文明に対して日本の精神が強調され、それに伴って『風俗』という言葉の示す範囲は非可視的な対象をも含むようになった。

明治30年代から大正末期にかけては、風俗史研究が衰退する。その原因是、西欧化が進行したことによって、日本の伝統があまり顧みられなくなったからである。

ところが、大正末期になると、西欧からの政治経済的な圧力を受けて、再び日本の伝統に回帰するための啓蒙活動が活発化した。この活動に便乗して、美術家やマルクス主義者、宗教者がそれぞれ異なる目的を持って風俗史研究を再開した。彼らは自身の組織を拡大するという目的と、国民を教化ないし団結させるという建前を持っていたが、あまり実効性を發揮できなかった。しかし、この時期の啓蒙活動は、『風俗』に上からの支配や統制という意味を付与した。

ただし、第二次大戦後の風俗史研究は、大正末期から昭和初期の研究成果をあまり反映しておらず、明治20年代の方法と連続性を有している。同時に、明治20年代の風俗史研究が現在、重要な位置を占めているからこそ、明治10年代以前に使用されていた『風俗』の用法も忘れられている。